

シーン6.

姉 「えー、あらためまして、本日はご来場いただきましてありがとうございます。
すみません、物語の中盤に、こんな突然のご挨拶。

お知らせしておきますと、現在、台本上は25ページになっています。折り返し地点、まさに中盤です。で、ここからお話しするのは、妹のナナが知らない、私だけの物語なんです。つまり少し話がそれるので、一度ご挨拶をと思いついて。ありがとうございます。ここまで、ねえ、訳の分からない…… そんなことないですか？ 優しい。ね、優しさ、大事、とても胸に響きます。ありがとうございます。……では、後半戦に突入しますが、実はここから、話は随分過去へと遡ることになります。」

桜坂さん 「こんにちは。」

姉 「あら、桜坂さん、どうもお久しぶり。えー、あなたぜんぜん変わらないわね。」

桜坂さん 「そうですか？ 駿河さんも、ぜんぜん。」

姉 「そうかしら。」

桜坂さん 「そうよ。」

姉 「で、さっそくで悪いんだけど、お昼休憩も短いので用件を。」

桜坂さん 「ええ、そのつもり。」

姉 「市役所のお仕事で来たって。」

桜坂さん 「ええ、今私ね。福祉課で働いているの。ほらこの町ってさ、バリアフリーとかすごい充実してると思わない？ そういうのを推し進めているのが私のお仕事。」

姉 「へー。でもそんな仕事と私。あんまり接点が。」

桜坂さん 「うん。でね、でも半分は、私の気持ちからここに来たのよ。」

姉 「気持ち？」

桜坂さん 「ええ、ほら、昔の話だけど、私イジメられてたでしょ？ 皆から、クラス中から。」

姉 「うん、そんなこともあったわね。」

桜坂さん 「でも駿河さんがすごいかばってくれて、それで私が標的じゃなくなった。」

姉 「まあ、そうかも。」

桜坂さん 「でも、その後はいつの間にか、駿河さんが私の代わりに。」

姉 「そう？ うん、私鈍感だから気づいてない。」

桜坂さん 「嘘。私泣いてるの見たことあるよ。」

姉 「んー、覚えてない。」

桜坂さん 「えー。私ね、自分がイジメられるのは耐えられたの、私ほら、ちょっと変わってるって言うか、なんだか自業自得って気持ちもあって、実はあんまり気にしてなかったの。でもさ、私をかばった駿河さんがイジメられるのは正直耐えられなかった。怒りが沸々と湧いたわ。」

姉 「そう、なんだかありがとう。」

桜坂さん 「お礼を言うのはこつちよ。で、私ね、給食に農薬入れてやったのね、覚えている？ 駿河さんがちょうど風邪かなにかで学校休んで、その時。」

姉 「……えっ？」

桜坂さん 「覚えてない？ ほら、大きな事件になったじゃない。自分は無事だったから忘れちゃった？」

姉 「忘れるわけじゃない！ あんな大きな。だって無差別殺人だって、ほら、学校の近くの宗教団体に、疑いがかかって。」

桜坂さん 「ね、とばっちり、かわいそう。」

姉 「えっ？ いや、嘘、まさかあれ、桜坂さん？」

桜坂さん 「やったのやったの。」

姉 「えっ、えっ、なんでそんな。」

桜坂さん 「だ、か、ら、駿河さんを守るためじゃない。」

姉 「えっ、いやだって、あれで死にかけた子までいるんだよ。」

桜坂さん 「ね、あいつら運がいいわね、1人くらい死ねば良かったのに。」

姉 「いやいやいや。」

桜坂さん 「でもさ、それでイジメがなくなったじゃない。」

姉 「いやイジメどころじゃなくて、だって、ずっと入院してる子だって。」

桜坂さん 「ね、良かったわね。だからイジメが根絶された。スッキリしたあ。イイ事をするど気持ちがいいわねえ。私あの経験で、正義感って言うのかしら、使命感？

自分の中にある、特別な使命に気づいた気がするの。」

姉 「使命？ いや、あの、えー、どうリアクションしたらいいか。正直怖いよ。」

桜坂さん 「でも、ゼーーんぶ駿河さんの為にやったことよ。」

姉 「いやいやいや。」

桜坂さん 「ふふふ、駿河さん可愛い。」

姉 「なんで今更そんな話、えー、そんな話をするために私を呼び出したの？」

桜坂さん 「あーん違うの違うの。そうじゃくて、純粹に市役所のお仕事で。」

姉 「市役所？ 本当に市役所？ 悪の秘密組織とかじゃないわよね？」

桜坂さん 「うん。ねえ私達のこの町さ、そもそも県全体がそうだけど、人口がどんどん都市に流出してさ、立ち行かなくなっているでしょ？」

姉 「えっ？ ああ、ごめんなさい、シヨックが大きくて急な真面目な話入ってこない。」

桜坂さん 「人口の流出！ 市役所的には税金も下がるし、そもそも人がいないと町って言うのは荒廃していくものなのね。店もどんどん潰れていくし。」

姉 「まあ、はい。そ、そうね。」

桜坂さん 「でさ、ここからは内緒の話、ね？」

姉 「えっ、今までは内緒の話じゃなかったの？」

桜坂さん 「あははは、駿河さん面白い！」

姉 「どこが？ えっ、す、少しも面白いこと言ってませんけど。」

桜坂さん 「駿河さんやっぱりいいわ。ね、やっぱ守ってあげたくなる。」

姉 「守らなくていいのよ、もう私イジメられてないし。」

桜坂さん 「それがそうもいなくなってる。あのね、この市が密かに人口の流出を防ぐ為にやっていることがあるのね。大きなプロジェクトよ。福祉にも大きな予算が下りるようになった。」

姉 「あの、ぜんぜん話が見えないんですけど。」

桜坂さん 「見えない、そうね。見えない話ね。あのね、人口の流出を防ぐ為に、この町では光を奪うことにしたの。」

姉 「光を、奪う?」

桜坂さん 「そうなの。定期的に、無作為にコンピュータが選んだ家族の中から1人、目の見えない人を作るの。年齢の高い人はダメよ、どうせ早く死んじゃうから、赤ちゃんが居れば理想的だけど、家族の中では下の、子供の世代、なるべく若い人の中から1人、盲目の人を作る。そうすると、あらか不思議、その家族は福祉の充実したこの町からいなくならない。ね、すごいいいアイデアでしょ?」

姉 「いや、あの、もう何にも言葉が出てこない。何それ。何それって、それしか。やっぱ悪の秘密組織なんじゃないの?」

桜坂さん 「あのさ、サイボーグ009って知ってる?」

姉 「し、知らないけど、石ノ森章太郎の漫画でしょ?」

桜坂さん 「あのね、正義の味方のゼロゼロナンバーサイボーグたちが戦っている悪の秘密組織はね、武器商人なのよ。戦争を起こして、自分達が作った武器を買っても、らうのが商売の大企業なの。」

姉 「何の話?」

桜坂さん 「ねえ、私達の住んでいるこの国さ、どんどん戦争をしたい感じに、戦争を出来る方向に進んでいる気がしない?」

姉 「まあ、そう見えなくてもいいけど。」

桜坂さん 「でさ、この国の上のほうに君臨する大企業たちの商売はさ、実は外国に武器や、武器の部品を売ったりするのが商売なのよね。分かるでしょ、悪の秘密組織、ふふ、ぜんぜん秘密でもなんでもないけど、私達のこの国さ、もしもゼロゼロナンバーサイボーグがいたら、守ってもらって側じゃないの、戦う相手こそが私達だと思わない?」

姉 「……、頭が痛くなってきた。」

桜坂さん 「あーんもう、聞いて聞いて。重要な話はこれからのよ。あなたの家が、コンピュータで選ばれたのね。」

姉 「えっ?」

桜坂さん 「もっと正確に言うと、あなたが、候補に上がってるの。」

姉 「いや、あの、」

桜坂さん 「そりや言っちゃいけないんだけどさ、本人になんか絶対。でも親友でしょ、私達、ね、そうでしょ?」

姉 「親友？」

桜坂さん 「ね、私ずっとそう思ってきた、駿河さんは私の親友って。」

姉 「いや、あの、」

桜坂さん 「言ってる？」

姉 「えっ？」

桜坂さん 「親友って。」

姉 「そんな、あの、久々に会って、」

桜坂さん 「守ってあげる。言ったでしょ、あなたを守ってあげるわ。親友だもの。」

姉 「……、さ、…桜坂、さんは、し、親友、です。」

桜坂さん 「ははは、ふふふ、あはははは、あーんもう、飲み込みが早くて良かったあ。

頭がいい人はいいわね。私もわざわざ来た甲斐があった。じゃ、妹さんにする

わね。」

姉 「えっ？」

桜坂さん 「妹さん、いるでしょ、そっちにしとくね。」

姉 「そっちに？」

桜坂さん 「やっぱイイ事をする気持ちはいいわねえ。」

姉 「いや、あの、」

桜坂さん 「じゃ、それだけを伝えておきたかったの。」（去る）

姉 「あつ、えっ、ちよ……、……待ってよ、桜坂さん！ ねえ！」（去る）

放心状態の姉。場面そのまま換わり・・・